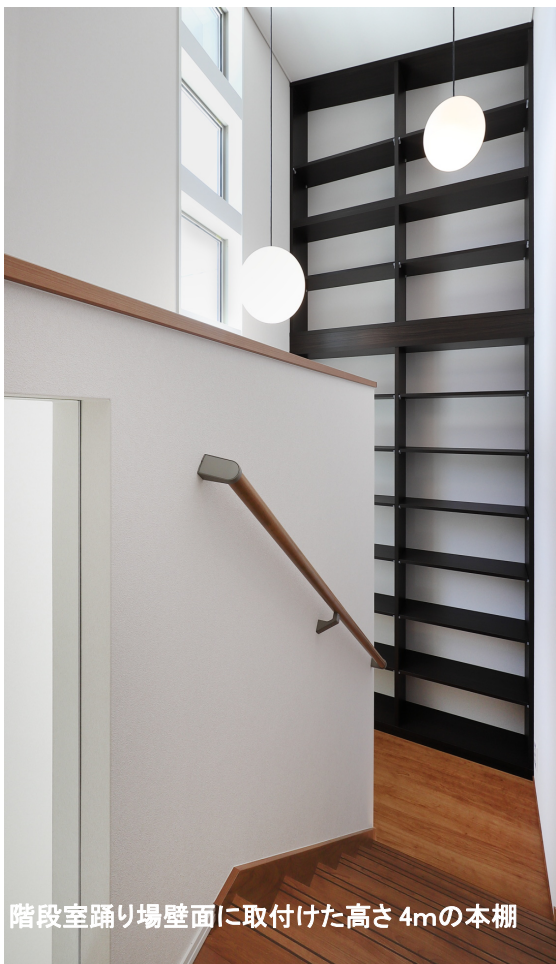


C値を測定.....南桜塚の家



前庭・アプローチ.....大きく跳ねだした樫柱目板が貼られた軒天井部分は玄関ポーチ



階段室踊り場壁面に取付けた高さ4mの本棚

旧知のゼネコン営業部長の依頼を受け、大手ハウスメーカー“Sハウス”とプレゼン競合の結果、完成した(2世帯3世代)住宅。近年ハウスメーカーは専任の設計者による3次元ソフトを駆使した美しい提案書を制作しているが私はいつもの手書きアナログスケッチ提案書との対決となったが、結果は何とか1勝を得ることになった。施主のご両親は部長の姉夫婦で、コロナ禍の中、施主ご家族は設計期間中に海外赴任となり、メールによる打合せは部長の義兄(御父上)を中心に進められていった。結果として、K氏(御父上)は住宅が完成する頃には並みの”建築士”では及ばない知識をお持ちの手強い発注者になられた(冷汗)。設計条件として部長の希望により総合建材メーカーLIXIL社の商品を使う事が求められた。手づくり仕上がりが多い設計者には新たな経験を得る仕事になった。



既存生垣を残した片流れ屋根の外観



C値測定風景

※C値：建物全体にある隙間面積(cm²)を延べ床面積(m²)で割った数値。建物の“気密性能”の指標で数値が小さい程優れた気密性を持つ。気密性が低いと断熱性能を低下させ、高いと内部結露を防ぎ、エネルギーコストを抑える事が出来る。

C値を測定.....南桜塚の家



1階 手前:ダイニング～ 奥:リビングルーム

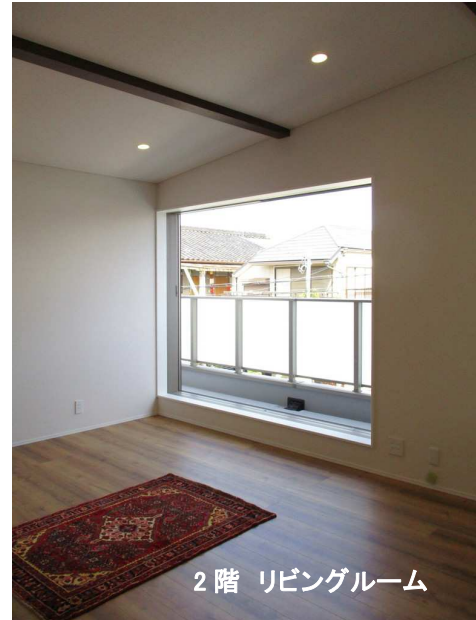


2階 ダイニング・キッチン



1階 リビングルーム

“高気密・高断熱”住宅と言われて久しいが、文字通り気密・断熱はセットにしないと意味が無く、ハウスメーカーでさえ気密性能＝C値を表しているのはごく僅かで、工務店も含め重要性を正しく理解はしていないと思う。特に関西では。コストを掛けて高性能断熱材を使っても隙間だらけでは全くの無駄遣いで、エネルギーコストも？で、目に見えない”内部結露“を発生させることになるので要注意だ。設計当初に既存住宅北側諸室の高湿気が話題となり、「100の失敗に学ぶ結露完全解決」(日経ホームビルダー編)による対応策を設計図面に落とし込んでいった。慣れていない施工者にとっては大変な現場となったが、建築主の要望による測定を行い、結果としてカナダの基準値 0.9 をクリアすることが出来た。ちなみに日本の北海道、東北で 2.0 その他 5.0 は全くの論外の数値だが現在基準は無くなっている。



2階 リビングルーム



1階 書斎



1階 仏間



2階 書斎